

平成21年 6月 3日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2007  
 課題番号：19730364  
 研究課題名（和文） 子どもの貧困・不平等に関する実証的研究

研究課題名（英文） Study of Child Poverty and Inequality

## 研究代表者

小西 祐馬 (KONISHI YUMA)  
 長崎大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：90433458

研究成果の概要：日本における「子どもの貧困」問題の構造を解明することを試みた結果、家族の経済的・文化的・社会的資源の不平等が、子どもの学力・教育達成だけでなく、子どもの日常生活様式に影響を与えていたことがわかった。貧困によってもたらされた不利は蓄積され、進路選択において決定的な影響を及ぼすことから、貧困は子どものライフチャンスを大きく制約するものであることがわかった。乳幼児期段階から、家族と子どもへの制度的支援を行う必要がある。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	150,000	1,450,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：子どもの貧困、貧困の代代的再生産、ライフチャンスの不平等、生活保護世帯

## 1. 研究開始当初の背景

生活保護世帯や「フリーター」などの非正規雇用の急増を反映した「格差社会」の議論がさかんになる中、OECDによって、日本の相対的貧困率(全体が15.3%、子どもが14.2%)が発表され、「格差」のみならず「貧困」についても注目が高まっている。しかし、それでも、具体的な支援策が公的に講じられるということは今のところなく、むしろ目につくのは、「小さな政府」「規制緩和」「民営化」といったスローガンで進められている低所得子育て世帯への社会保障の削減である。児

童扶養手当の削減、生活保護における母子加算の廃止、就学援助の文科省補助金削減など、低所得世帯にとって重要な制度について大きな後退が見られ、子どもの生活と教育に関する二極化がますます進んでいくことが危惧される。貧困は、解決済みのものではなく、極めて現代的な課題である。本研究では、こうした状況を前提に、貧困のもとで成長する子どもの現状分析を行い、ライフチャンスの平等を保障するための支援策を探るものである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では「親（家族）の貧困が子どもに与える影響」のメカニズムを解明することを研究の中心にすることとする。これまでの筆者の研究から、貧困にある子どもは、現時点において、経済的な不利のみならず、生活・行動を大きく制限し、教育にも大きな不利が生じていること、過去の生活において、いじめ、不登校、両親の離婚、家族間の葛藤（虐待、DV）、健康問題などの連鎖・集積を伴う可能性が高いこと、将来の進路選択（大学進学）において決定的な影響を及ぼし、子どものライフチャンスを大きく制約するものであること、などが示唆されている。よって、今後は特に、将来の「自立」を考える際に重要となってくる子どもの「ライフチャンス」に焦点を当てていきたい。

(2) 年々値上げが行われている高額な教育費に代表されるわが国の家族依存的システムのもとでは、子どものライフチャンスは家族の経済・文化・社会関係面に関する資源によって規定され、日常生活や意識・意欲と相互に関連しあう。ライフチョイス（人生の諸画期における選択）は、その結果としてあらわれてくる。こうしたライフチャンスをめぐる一連の相互関係と選択プロセスが、いかに不平等であるのか。本研究では、子どもと家族の現時点の状況を検討し、貧困が子どもに与える影響のプロセスの分析を行っていくことを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 国内外のソーシャルワーク・教育社会学・社会政策などにおける、貧困が子どもに与える影響・貧困の世代的再生産の研究・国際比較研究などを扱った文献・資料を収集し、日本において「子どもの貧困」を研究する際の視角について検討する。

(2) 子どもへのインタビューを行う。まず、子どもの放課後や休日の過ごし方、遊ぶ場所、友人関係なども含めた生活スタイル全般についてのインタビューを行ったうえで、子どもの主観的意識に迫っていく。子どもの進学希望や将来展望について把握する。

### 4. 研究成果

#### (1) 「子どもの貧困」研究の視点

##### ①子どもの貧困の多面的理解

ユニセフ・イノセンティ研究所の報告書『子どもの貧困——豊かな国における子どものウェルビーイング（Unicef. Child Poverty in Perspective: An Overview of

Child Well-being in Rich Countries.2007.）』は、先進諸国における子どもの状態（子どものウェルビーイング）について、低所得、医療と安全、学力、家族・友人関係、飲酒・喫煙率、いじめ経験、生活満足度、学校が好きかどうかなど、さまざまな領域の指標を数値化して分析を行っている。比較した結果、ヨーロッパ諸国がいずれの指標においても上位半分に位置し、総合ランキングの上位は北欧4カ国が占めていること、低所得と他の次元とはゆるやかな相関関係がみられるが、低所得だけが子どもの状態に影響を与えるわけではないこと、その国のGDPと総合ランキング順位とは関係がないこと、などが示されている。

このような調査研究の前提となっているのは、貧困問題にアプローチするには多面的な領域をカバーする必要がある、逆に子どものウェルビーイングを捉えようするときにも指標として貧困を組みこむことが不可欠である、という視点である。

##### ②子どもの発達段階における貧困の時期と期間

欧米における、貧困が子どもに影響を与えるメカニズムを明らかにしようとする研究は、現時点での貧困率のみに注目するのではなく、個々の貧困状況について、それがどれくらい継続したものなのか、いつのタイミング（年齢）での経験なのか、といった時間的視点から貧困の影響を問うことにもつながっている。

こうした研究は、親が低所得であることが子どもにどのような影響を与えるのか、子どもに影響を与えるのは所得なのか、それよりもむしろ家族構成、親の職業、親の学歴、親の生活史における行動・困難（10代での出産、犯罪歴、ドラッグ使用など）などの非経済的要素のほうなのか、といった視点から分析が行われ、研究方法としては子どもを長期にわたって追跡したパネル調査の統計的分析が採用されている。

その結果の一部としては、5歳以前の貧困がもっとも大きく子どもの学力に影響を与えていること、貧困のもとで育つことは、テストの点数・教育達成・10代での妊娠・未婚での出産などへの影響は比較的小さいが、将来の収入には非常に大きな影響をあたえていること、長期間の貧困は子どものメンタルヘルスにより大きなダメージを与えることなどが挙げられ、さまざまな研究がさまざまな結論を導いているが、大量のアンケート調査の分析という研究方法の限界もあって、いまだ決定的な合意を得られるような結論は出ていない。しかし、ほぼコンセンサスが得られていることとしては、乳幼児期の貧困と長期にわたる貧困の重大性が挙げられる。乳

幼児期における貧困経験、小学生段階における貧困経験、中学生段階における貧困経験などを比較した場合、5歳未満での貧困の経験が、子どもの発達にもっとも大きな影響を与えるということ、そしてそれが長期にわたった場合、深刻な影響を受けることは免れないだろう、ということである。

### ③貧困の世代的再生産

先述の欧米におけるパネル調査は、貧困の世代的再生産のメカニズムを解明することも主要な目的としている。パネル調査が実施されていない日本だが、現段階では、生活保護を受けている親への調査を中心に、その状況が見え始めてきている。

「子どもは親を選べない」と考えるならば、こうした親の不利が子どもの育ちに影響を与えることは、あってはならないことであり、何らかの手だてが講じられてしかるべきだが、子育て家族への支援が極端に手薄で、すべてが「親の責任」に帰せられてしまう日本)においては、こうした親の不利が緩和されないまま、子どもはダイレクトにその影響を受けてしまうことが危惧される。

### ④子ども中心の視点

イギリスで「子どもの貧困と社会的排除」について研究しているリッジは、イギリスのメディアが子どもの貧困を、ドラッグ、飲酒、売春、暴力、虐待などとの関連でしか取り上げず、子どもたちを「加害者」「被害者」としての文脈でのみ捉えるため、低所得の大多数の子どもが送っている日常生活・経験、ニーズが見えないままである、重要なのは子どもの目から問題を捉える「子ども中心の視点」だと指摘している(Ridge, Tess. *Childhood Poverty and Social Exclusion: From a Child's Perspective*. The Policy Press.)。

貧困が子どもに与える影響について検討する際、単純に「親から子へ」といった直線的な構図だけで問題を捉えるのではなく、子どもの視点にたつて、子どもを選択の主体として捉えて、その意識も含めて問題構造に迫っていくことが必要である。

#### (2) ライフチャンスの不平等

貧困にある子どもたちにおいて懸念されることは、これまでの不利の蓄積が、ライフチャンスの制約につながり、思い通りの選択(ライフチョイス)ができず、将来の不利へと帰結してしまうことである高校生への進路に関するインタビューから、このことがわかる(いずれも高校3年生の男子)。

絵を書くのが好きなので、美術関係って  
いうか、デザイン関係に進みたかったんで  
す。でもそういう大学とか専門学校とかは

学費が高いんで、無理なんです。新聞奨学生っていうのがあるのも聞いたんですけど、けっこう厳しいらしくて。今は、高校の先生に勧められて、(公立の)職業訓練の学校に行こうと思っています。全然想像できないけど、仕事のためだって割り切れば、しょうがないかなとも思います。問題は、そこに入れるだけの力(学力)があるかどうかなんですよね。

中学の時、最初は進学校行こうかと思ってました。でも、そのあと大学行くとか考えると、4年間の負担はうちにとっては大きいし、大学言ったら生活保護が切れるって聞いて。いろいろ聞いた。それで、母親の勧めで工業高校に。すごく悩みました。中学校では成績は上の下くらいだったのに、その成績だったら(進学校に)行けたのに。(中略)今の高校行ってみたら、就職先でびっくりしました。ラインで組み立てとか鋳造とか、肉体労働ばかりで、とにかくきつそうなのを実感した。すごいびっくりして。

これらは経済的理由から高等教育への進学を断念しなければならなかった事例である。日本の家族の教育費負担は、世界でもトップレベルの額であり、低所得世帯の子どもへの大学進学を断念させる決定的な原因となっている。

ここには経済的要因と同時に、「学力」の問題が横たわっている。日本学生支援機構の奨学金や授業料免除制度は、成績優秀者に限られ、貧困家族の子どもは、いずれも利用できないことが多い。また、早期の段階からの低学力は、進学に向けての動機づけを弱め、自らその選択肢を消すような意識を持つことになる。

#### (3) 今後の展望

子どもの貧困とは、第一に現時点において、経済的な不利のみならず、生活・行動を大きく制限し、教育にも大きな不利をもたらすものであった。第二に、貧困にある場合、これまでの生活において、いじめ、不登校、両親の離婚、家族間の葛藤(虐待、DV)、健康問題などの連鎖・集積を伴う可能性が高かった。第三に、「低所得」という直接的な不利、そしてこれまでの蓄積された不利は、進路選択(大学進学)において決定的な影響を及ぼし、子どものライフチャンスを大きく制約するものであった。問題は、横軸(問題の連鎖)にも縦軸(ライフチャンスの制約)にも連鎖していく。

今後は、子どもの現在の「生活」が、社会階層・階級間でどれほど分化しているのか、不平等なものとなっているのか、量的調査の

実施などによって明らかにしていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①小西祐馬、子どもの貧困とライフチャンスの不平等、部落解放、610、59～66、2009年、査読無

〔図書〕(計 2 件)

①浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編著、子どもの貧困、明石書店、2008年、385頁 (小西祐馬「先進国における子どもの貧困研究—国際比較研究と貧困の世代的再生産をとらえる試み」276-301頁を執筆)

②岩川直樹・伊田広行編著、貧困と学力、明石書店、2007年、347頁 (小西祐馬「子どもの貧困とライフチャンスの不平等—構造的メカニズムの解明のために」114-131頁を執筆)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

小西 祐馬 (KONISHI YUMA)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：90433458